

# 水滸傳の對異民族意識について

——水滸起義の性格についての一試論——

中 鉢 雅 量

水滸傳には、蔡京、高俅など北宋末の黒い統治集團と、その手先である地方の貪官汚吏を糾弾する、いわば反權力意識が色濃く流れているが、一方、北宋末には、北邊よりする遼、金の侵略にいかに対抗するかが朝野を問わず人々の重大關心事であつたにかかわらず、これら異民族の侵略に對抗しようという考えは、歴史小説として見た場合、水滸傳にはあまり表現されていないと言へる。はなはだ奇異なことだが、梁山泊の英雄たちは濫官汚吏を懲罰するのに専らであつて、北邊より迫り來る危機にはさほど意を用いなかつた如くである。以下、水滸傳にはなぜ「異民族の侵略に對抗する意識」が稀薄なのかを考えてみたい。

## 一

とにかく、八十三回から八十九回までの大遼遠征の段を例外として（この部分は後で詳論する）、大遼がどうか、金國の侵略をどうしようかと、梁山泊の英雄たちが口にしたり考えたりしたという記述は、私の見た限りでは皆無である。

ただ、事柄としては、大金國人の曾一家が君臨する曾頭市を攻略するというのがある。これは、金毛犬段景住が北地で盗んできて宋江に

水滸傳の對異民族意識について

獻上しようとした名馬を、途中で曾家の五人の息子に略奪され、また曾一家は「掃蕩梁山清水泊、剿除晁蓋上東京」(六十回)と、梁山泊と對抗する氣構えを見せていることを知り、怒つた晁蓋は征討の軍を起すという段である。吳用が「我等相争、皆爲氣耳」(六十八回)、ただ一時の激しい感情に動かされたものだ、と言っているように、こんな些細なきっかけで戦端を開くのであつて、彼らが金國人だからどうだということとは全くない。この點で、楊紹宣氏が指摘するように、時遷が鶏を失敬したことが戦いの契機となつた祝家莊との場合と何ら變わりはない。

しかし以上のようなことを論じる際には、靖康の變(一一二七年)以後、北中國の人民が金軍の劫掠によつて塗炭の苦しみを受けるようになる時期より、梁山泊の英雄たちが活躍した時期(水滸傳によれば、梁山泊に勢揃ひしたのが宣和二(一一二〇)年。方臘征討からの歸還が宣和五(一一二三)年)の方が、僅かではあるが前にあるという點は押さえておかねばならない。張清の子張節が成長して、

「限吳玠大敗金兀朮于和尚原、殺得兀求鬚鬚鬚而遁。」(百十回)と活躍したり、また方臘征討後、御營指揮使に任ぜられた呼延灼が、「後領大軍、破大金兀朮四太子、出軍殺至淮西、陣亡。」(百二十

回)であつたりしたというような記述はあるのが、この必要を感じさせる。

それにしてもたかだか四、五年のずれに過ぎない。この事實の一部分の説明にはなり得ても、全體としてはやはり疑問のまま残る。

しかし、彼らは、「盡忠報國」(七十一回)、八十三回、八十五回、百十回)、「同心報國」(七十一回)、「與國家出力」(七十七回、九十三回)というような、一般的、觀念的な愛國心はもっている。ただこれらの愛國心を具體化した、大遼や金國の中國侵略と戦おうという氣概を表現した箇所は、大遼遠征の段を除けばついに見當たらぬ。

## 二

次に、この觀點からしばらく大遼遠征の段の分析を試みたい。この段が、初めに成立したいわば原水滸傳に入っていたか否かは説が分かっている。魯迅「中國小説史略」は、

「以平方臘接招安之後、如『宣和遺事』所記者、于事理始爲密合。」と、遼國、田虎、王慶の段を除いたものが原水滸傳であろうというが、何心氏「水滸研究」(一九五四、上海)のように、百十五回本が原水滸傳に最も近いという考えから、この三つの段ともあったとする説もある。征遼、平田虎、王慶の戦役では、宋江側の死傷者も多いことは多いのであるが、梁山泊の一〇八人は一人も戦没していない。これは、次の方臘征討戦で「〇八人が次々と倒れていくという設定になつており、これらの戦役で早くも死なせてしまうと後がうまく續かなくなり、そこで一人も死なさないように配慮しつつ増し加えたためだ、というのがこれら三段は後に挿入されたとする説の根據である。

私は、平田虎、王慶の段は、間違いなく後人の挿入したものだと思ふ。水滸傳によれば、

○宋江ら全員が宋朝の招安を受けたのは

—宣和四年三月(八十二回)

○大遼を破つて凱旋するのが

—宣和四年冬月(八十九回)

○方臘征討に出發するのは

—宣和五年春(これは明示されていない。しかし方臘征討からの凱旋が宣和五年九月であり—百十九回、出發は、百十回の描寫から春であるのは明らかである。)

つまり田虎、王慶の話は時間的に入りこむ餘地がないのである。宋江らが田虎を破つたのを賞し、新たに王慶討伐を命じる詔書の日付が宣和五年四月になっているが(百一回)、これは、明らかに無理に挿入したために生じた食い違いである。

この點を根據に私は、田虎、王慶の話はもともとはなかったものと確信するが、次に大遼遠征の段について時間の前後關係を調べてみると、宣和四年の冬に大遼遠征から凱旋し、翌五年の春に方臘征討に出發しており、みごとに照應する。この點から、大遼の段はもともと存在したと考えるのが自然である。ただし、大遼の段を抜き去つても、招安を受けてから方臘征討まで七ヶ月くらい空きはするが、別におかしいことはないし、また、もともとは招安の直ぐ後に方臘の段が來たのに、方臘征討の日付を後にずらし、時間的な矛盾が起らないよう配慮しつつ大遼の段を加えたとも考えられるので、必ずしももともとからあったものと断定もできない。とにかく、しばらく「水滸傳の一部」

とみなして分析の作業を進めることにしたい。

初めに、宋江らがどんな考えで大遼遠征に従ったかということについて。征虜破遼の詔勅をひざまずいて聴いて「衆皆大喜」したとあるが續いて次のように記されている、

「宋江等拜謝宿太尉道『某等衆人、正欲如此、與國家出力、建功立業、以爲忠臣。……、便當盡忠報國。』」(八十三回)

また出立に際しての天子の激勵の言葉に、宋江は次のように答えている、

「臣披肝瀝膽、尙不能補報皇上之恩。今奉詔命、敢不竭力盡忠、死而後已。」(同)

つまり「與國家出力」とか「盡忠報國」とか「補報皇上之恩」といった倫理感が彼らにあり、それを一つの具體的な形に表わしたものがこの度の大遼遠征である。

招安を受けて都に向かい、大軍を城外に駐留させて天子の號令を待っていたら、たまたま大遼に遠征せよというお達しが出た。これは平生の「國家のためになりたい」という願望をかなえるチャンスでもあり、それに何よりも一〇八人が別れ別れにならずにすむ、引き受けよう、ということになったのであって、彼らの意識の上では、侵略軍の撃退でも、また農民起義の鎮壓でも何でもよかったのである。このように彼らの大遼遠征は反異民族意識そのものから出たものではない。方臘征討に出立する際にも、宋江は、

「某等情願部領兵馬、前去征剿、盡忠報國。」(百十回)

と述べているのを考え合わせると、大遼遠征も方臘征討も、彼らの意識では同一の次元―國家のために力を盡くすという―から出たもの過ぎないようだ。

さて、このような「内心の要求につき動かされた」のではない、あまり激越ではない動機で大遼遠征に出ていったものだから、檀州、薊州を落とされて仰天した遼國が、宋江らを招安して一〇八人一人一人に官爵を與えようという懷柔策を取ってきた時、吳用は「長嘆一聲、低首不語、肚裏沈吟」し、

「棄宋從遼、豈不爲勝、只是負了兄長忠義之心。」(八十五回)

と迷ったのもなるほどとうなずける。吳用が反異民族感情をもち合わせていないことがこれではつきりする。しかし彼らは、ここで宋を棄てて遼に降りしかなかった。それは宋江が

「縱使宋朝負我、我忠心不負宋朝。……吾輩當盡忠報國、死而後已。」(八十五回)

と主張したからである。しかし宋江がこう主張したのは、どうしても遼國を撃滅するという積極的な意欲からではなく、宋朝に負きたくないという消極的な倫理觀から出ていることに注意する必要がある。

宋江は、「盡忠報國」という類の倫理觀をもとにした愛國主義者ではあるが、その彼にしても異民族の侵略に對抗しようという意識そのものは極めて稀薄であると判断せざるを得ない。

最後に、宋江らに追いつめられた遼國は、宋朝に投降を申し出、一方蔡京、童貫らが遼國の賄賂を受け、天子に投降を納れるよう勧めたため、天子はそれを許し、戦闘を止め、軍馬を回すことになった。それを聞いて宋江は、「非是宋某怨望朝廷、功勳至此、又成虛度。」(八十九回)と嘆き、

「某等一百八人、竭力報國、并無異心」(同)

に對して報いられることがないかもしれないのを憂えている。そしてここでも「竭力報國」意識が先行しているのを見ないわけにはいかな

い。もし彼らに異民族との對抗意識があるなら、さしあたっては侵略者を一應撃退した満足感にひたり、その次に、二度と遼國の侵入を許さないような對策——例えば占領した檀、薊、霸、幽の諸州をあつさり返したりせず、そこに軍隊を駐留させるよう當局に進言するとか——を考えたであらうと思われる。

つまるところ、大遼遠征という行爲は、彼らの忠義の心情の一つの具體化であり、異民族の侵略を斷乎撃退するというような勇ましい氣持ちから出たものではないのである。この點で方臘起義の鎮壓を引き受けたのと同じの意識構造に立つものであり、この二つの行爲は、前述のように曾頭市攻略と祝家莊平定とが全く同じ意味しかもたなかつたと同様、全く同じ意味しかもたない。

### 三

ところで、唐宋時代の愛國心は必ず皇帝に對する忠義の念に裏打ちされているのが特徴である。例えば杜甫の場合がそうである。

「唯將遲暮供多病、未有涓埃答聖朝。」

——「野望」

「小臣魯鈍無所能、朝廷記識蒙祿秩。周宣中興望我皇、灑血江漢身衰疾。」

——「憶昔」

などから旺盛な忠義心がうかがえるし、更にこれは

「中興諸將收山東、捷書夜報清晝同。……已喜皇威清海岱、常思仙仗過崆峒。」

——「洗兵馬」(「收京後作」の自注がある)

というふうに愛國心と結びつく。この邊の事情を中國科學院文學研究所編「中國文學史」(一九六三年、北京)では次のように指摘している、

「彼は國家の不幸、人民の苦難及び封建社會のさまざまな矛盾の解

決を、常に皇帝に委託し、ただ中興の主、堯舜の君に依據してはじめて一切の問題を解決できると考える。このことよって、杜甫は鋭く社會の階級對立の現象を看取しても、決して封建制度を根本的には否定できないのである。階級的、時代的限界は、また杜甫にも忠君と愛國とを一つの概念に變えさせた。……」(四〇五頁)

南宋の詩人陸游の場合でも、この間の事情は全く同じであるが、ただ彼にあつては、國土の半分を異民族に占領されているという國情を反映して、その愛國心は異民族に對する激しい敵がい心に轉化している。

「中原嶮旱胡運衰、王師北伐方傳詔、一聞戰鼓意氣生、猶能爲國平燕趙。」

——「老馬行」

他にも「報國計安出、滅胡心未休」(「枕上」)とか、「逆胡未滅心未平、孤劍床頭鏗有聲」(「三月十七日夜醉中作」)と言っている。杜甫の場合と同様、彼の「報國」心は皇帝に對する忠誠心と結びつき、これが異民族に對する敵がい心の土臺になっていることは明らかであるが、しかし彼の敵がい心は、杜甫のそれよりはるかに強烈である。

「忠君」という牢固として抜き難い觀念が根底に横たわり、それにもとずいてあらゆる發想をするのは、古い時代の士大夫には共通して避けられない限界であった。ここにおいて愛國は忠君と同じ概念と化する。大詩人杜甫といえどもこの歴史的、階級的限界を越えることはできなかった。

そして陸游の愛國主義も、こうした封建士大夫の儒教的倫理觀を根幹にしているわけだが、しかしそれは、この封建道德の一つの表われなどというにはあまりに激しく、あまりに盛んである。もはや基本になつては忠君意識などによってその價值が少しも減ぜられないほど

に獨自の意義をもっている。しかしそれは彼の生きた激動の時代と、時には金國と直接對峙する最前線へ赴任したりした彼の生活經歷とから由來するものと考えられる。

#### 四

次に私は、「二」の項で説明した、水滸傳には、大遼遠征の段は別として、全般的に異民族との對抗意識が稀薄であるという點に關して、なぜそうなのかいささかの説明を試みたい。

梁山泊に結集した一〇八人は、その抱く意識から大ざっぱに次の二つに分類される。

一、「盡忠報國」、「同心報國」、「與國家出力」というような封建的倫理觀をもった者。宋江、戴宗、花榮などで知識人グループ。

二、右のような封建的倫理觀はもたない者。李逵、魯智深、武松などで、非知識人グループ。

古い時代の中國では、「知識人」とは、單に學問ある者というだけの意味しない。學問があるということは官吏になるための不可缺の條件であり、また官吏となって出世するためには學んだのであるから、知識人とはとりもなおさず官吏かあるいは官吏志願者を意味する。官吏はその時の支配機構の擔い手であり、従つて彼らは本來的に體制の擁護者であつて、その反逆者では決してない。ただ、出世コースを順調に進んでいたのが、ある時の仕事の上のミスか何かでそこにおれなくなり、止むなく反抗の道を歩む者が出てくるし、知識人といつても、科擧を通つたわけでもなく、一生うだつのあがりそうもない下級役人は、潜在的な反抗心をもつていて、何かのきっかけでそれを爆發させる者も出てくる。花榮や楊志は前者であり、宋江や戴宗は後

者である。なお花榮や楊志は軍官出身であり、知識人という言葉にはびたりとは適合しない感じであるが、その抱く意識は宋江らと同質であり、本來的な體制の擁護者である點も共通しており、敢えてこのグループに入れる。

また非知識人とは、貧しいがために學問する機會に恵まれず、おそらくこの大部分は文盲である人達である。農民階級を中心とするこの非知識人は、過去の中國では知識人とは比較にならないほど多かつたわけであり、廣範な被支配階級を形成しており、官吏などによつてそこから抜け出す道はほぼ完全に閉ざされていた。たまに「一身本事」によつて下級官吏にとりたてられる者がいても、李逵（江州の獄卒）や武松（陽穀縣の都頭）の例が示すように、それらは獄卒や警官に限られていた。彼らは體制から有形無形の壓迫を不斷に受けているので、初めから反抗の姿勢を表面化させている。

初めに後者を問題にしたい。

彼らがなぜ反抗の道を歩むようになったか、その直接の動機は水滸傳では多くの場合明らかになされていない。しかし比較的是っきりしたものもないことはない。例えば阮氏三雄の場合は生活苦に迫られて反抗を決意したのである。彼らは魚はとれなくなり、面白くないので博奕を打つ、「赤條條地」スッカスカに負けてしまつてますます不快になるといふどんづまりに來ていた。魚がとれなくなったのは、直接には梁山泊を王倫等に占領され、そこで漁ができなくなったためだが、一方役人は彼らの生活を保障すべく對策を考へるところか、

「如今那官司一處處動彈、便害百姓、但一聲下鄉村來、倒先把好百姓家養的猪、羊、鷄、鵝、盡都吃了。……若是那上司官員差他們緝捕人來、都嚇得尿尿齊流、怎敢正眼兒看他。」（十五回）

と書いていたらくであつたせいもある。そこで彼らは一も二もなく呉用の誘いに應じたのである。この他にも生活を破壊されての反抗の例は多くあると思われるが、張青、孫二娘夫婦、あるいは張横、張順兄弟のように、水滸傳に登場する時は既に『盜賊』になつていて、しかも止むを得ずうなつた來歴はほとんどの場合語られない。楊紹宣氏は「宋史」任諒傳を引いて、石碣村の漁民生活は北宋時代の情況と合致するとしつゝも、

「任諒が梁山泊の近邊に王安石の保甲制度を實施して當地の漁民を壓迫したようなことは、水滸傳では少しもふれていない。今日から見ると、一つの缺陷であつたといわれないわけにはいかない。」

と述べ、阮氏三雄の場合でさえ歴史狀況の反映のしかたが不十分だと指摘しているくらいである。關履權氏は「論兩宋農民戰爭」（歴史研究）二期、一九六二年二月で宋代の農民起義に参加した者の出身階層を分析し、要旨次のようなことを述べている。

宋の統治者は『荒年募兵政策』を取り、饑饉に苦しむ農民を軍隊に繰り入れて農民の反抗をそらそうとし、またそれがあつた程度成功したが、そこで、宋代の士兵は實際には軍服を着た農民であり、軍營に招かれたというものの囚徒のような生活を送り、顔にいれずみをはられ、脱走は嚴禁されるといふふう自由に自由は奪われ、苦役は課されるしして何度も兵變が起つた。

宋代の兵士は多く農民で構成されていたことが解るが、一〇八人の中でも、はつきりとは記されていないが、武松や劉唐、石秀などはほとんど農民ではなかつたかと推定される。

また末端の警備役人や獄卒などには下層階級の者を登用し、民衆支配の先頭に立たせることによつて下層階級の者同志を互いに反目さ

せ、統治し易いようにしたのは我が國の江戸時代によく見られたやり方で、宋代にも同じような事情があつたとすれば、江州の獄卒であつた李達などももとは農民である可能性が強い。もと歩兵都頭雷横も、劉唐に「你那作害百姓的腌臢潑才」と罵られてはいるが（十四回）、もとをたどれば「打鐵匠人」であり、『作害』ではなく、『被害』の方で、被壓迫階級の一員であつたに違いないのである。

そこで彼らには生活破壊からくる反抗者が結局は多いのだからと思われるが、そうでない場合でも、この部類に入る者は、現體制に必ず何らかの疏外感をもつていたはずである。魯智深なども、根底にはそうした反抗意識が横たわつてゐるに違いないが、やはり多くの場合そこまでははつきり示されていない。

このように實際生活の狀況やそこから反抗に立ち上がる過程がほとんど描かれないか、あるいは阮氏三雄の場合のように不十分にしか描かれないのは、水滸傳話の成立當初にはある程度この邊の事情をリアルに反映していたのが、時代とともに進む「演變」の過程で次第に抜け落ちていったためだと考えることもできるが、この問題の論證は後日を期すことにしたい。

彼らは大體において招安を受けることには反對だつた。

「老爺只除了這兩個（柴進・宋江）、便是大宋皇帝、也不怕他。」（三十五回）

という石勇、

「俺這裏兀自要和大宋皇帝做個對頭的。」（三十九回）

という朱貴、

「今日也要招安、明日也要招安去、冷了弟兄們的心。」（七十一回）と叫んだ武松。これに大聲で

「招安、招安、招甚鳥安。」

と應じ、「只一脚、把桌子踢起、擲做粉碎」(七十一回)した李達、

「招安不濟事、便拜辭了、明日一個個各去尋趁罷。」(同)

という魯智深。

彼らには『忠君』というような封建的な觀念は絶えて存在しない。天子―國家に盡くす氣はないし、一方君側にあつて權力を壟斷している悪臣どもに對する反感は強い。そこで『招安不濟事』、招安が何になる、という氣になる。

そして招安を受けた後、實際に彼らは冷遇され、最後の方臘征討によつて多くのメンバーが戦没、病死し、一〇八人は離散して水滸起義は終幕を迎えるという運命をたどつた。宋江自身は、忠義を全うしたとして、この悲劇的な終局をさほど悔んでいる様子はないが、この集團に屬する者も、宋江らの意見に従つて招安を受け、その後の戦役に従事したとはいへ、このような事の成り行きに本心から満足していかどうかは甚だ疑わしく、むしろ絶えず潜在的な『反心』があつたと考へる方が當つているのではないか。終わりに近く、宋江が藥死させられようとしてゐると聞いた李達は、「哥哥反了罷」と叫び、

「我鎮江有三千軍馬、哥哥這裏楚州軍馬、盡點起來、并這百姓、都盡數起去、并氣力招軍買馬殺將去。」(百二十回)

と提案したが、李達のこの反抗心こそこの集團の者全體の心であらう。そしてここでも彼のこの反心を押さえたものは、宋江の

「我爲人一世、只主張忠義二字、不肯半點欺心。……寧可朝廷負我、我忠心不負朝廷。」

という忠義心であることに注目しておきたい。

「三」で見たように、當時にあつては忠君が即ち愛國である。農民

など下層階級出身の彼らは、忠君というような封建的倫理觀に煩わされる必要はなかつた。招安を受けて忠君に勵むなどは彼らの意識にはどうもびつたり來なかつたに違いない。この彼らの氣持ちを端的に表現したのが、李達の次の言である。

「你那皇帝、正不如我這裏衆好漢、來招安老爺們、倒要做大。你的皇帝姓宋、我的哥哥也姓宋、你做得皇帝、偏我哥哥做不得皇帝。」(七十五回)

招安に反對したり、消極的になつたりするのは當然である。

しかしながら忠君意識の缺如は、同時に愛國心の缺如となつた事實もまた見逃がすことができない。忠君愛國という時代的制約の中にあつては、忠君の缺落はまた愛國の缺落をも意味したのである。そして愛國心の一表現たる異民族との對抗意識も、それにつれて缺落することになる。大遼遠征の際にも、彼らが異民族への激しい敵意を表明しないのは當然ということになる。

今日から見るなら、彼らが招安に反對したのは、宋江らの投降路線と對立するいわば革命路線であり、それは彼らの被壓迫階級としての革新性から出たものである。そこには當時の悪しき權力集團と、眞の問題解決まで徹底的に闘い抜こうという積極的な姿勢がある。しかし異民族の侵略と對決する段になると、宋江らが一定の積極的姿勢を示し得たのに對して、彼らは少しも意欲的になり得なかつたわけであり、それが彼らの出身階級が招來した、この時代では止むを得ない限界であつた。

ところで、正に彼らの意識と行動こそが、おそらくは中國歴代の農民起義の實情を忠實に反映しているのである。私は、宋江に指導され

た革命的行動全體を農民起義と斷じてしまふのには反對で、歴代農民起義の理念と行動とを受け繼いだ武松や李達らの立場と、そうではない宋江らの立場とはつきり區別されるべきものと考えられる。しかし宋江らの考えが梁山泊では絶えず指導的な理念であったことも事實で、従つて水滸の革命的行動全體には、農民起義と一口に斷じてしまふのは別の評價が與えられるべきである。この點についても後で私なりの解釋を試みることにして、ここでは武松や李達などの意識と行動とが、歴代の農民起義の性格と同質のものであるのを見よう。

侯外廬氏は「中國封建社會前後期的農民戦争及其綱領口號的發展」〔歴史研究〕一九五九年七期〕で、

それまでの農民起義も、『平らかにせよ』『均しくせよ』という要求を掲げたが、何を『平、均』するのかわからなかつた。唐末から宋代にかけて、これは『貴賤を等しくし、貧富を均しくせよ』というより明確なスローガンとなつたが、しかしこの時點ではまだ『土地を均分せよ』という綱領を立て得ず、明末の李自成の起義に初めて『田を均しくし、糧を免ぜよ』という戰鬥的スローガンが現われる。

という趣旨のことを述べているが、いずれの場合も生活破壊に根ざした經濟的な要求であり、<sup>(6)</sup>しかして異民族の侵入の危機が存在した場合でも、それと對決するという思想も行動も特に明確なものではなかつたようである。これらの事情を、水滸傳と同時代の方臘起義と南宋の鍾相、楊么起義とについて、更に詳しく検討してみよう。

「今賦役繁重にして、官吏は侵漁し、農桑は以て供應するに足らず。……且つ聲色狗馬、土木、禱祠、甲兵、花石雜費の外、歲ごと西北二虜を賂するの銀絹は百萬を以て計る。皆吾が東南赤子の膏

血なり。」〔南宋、方勺「青溪寇軌」〕

とあるように、生活破壊に抗して立ち上がったのであるが、一方、西北二虜の侵略の危機が現實に存在したにもかかわらず、その危機をどうにかしようと考えていたふしは、現存する資料からはうかがわれぬ。

しかし彼らが打倒の對象としたのは、同じく「青溪寇軌」に

「軸に當たる者は皆齷齪邪佞の徒にして、ただ聲色土木を以て上心を淫逸するを知るのみ。朝廷の大政事は、一切恤えざるなり。在外の監司、牧守は、また皆貪鄙風を成し、地方を以て意と爲さず。」とあり、

「朱勛を誅するを以て名と爲し、官吏、公使を見れば人皆之を殺す。」

とあるように、君側の奸臣、地方の濫官汚吏であることにも注目しておきたい。

建炎四（一一三〇）年から紹興五（一一三五）年まで、洞庭湖、湘水地方に勢力を張り、岳飛に鎮壓された鍾相、楊么起義の場合でも、北中國を金軍に占領され、近くの潭州さえ金に陥るといふ民族の危機に當面しながら、彼らの理念はやはり

「鍾相」陰かにその徒に語る、則ち曰く、『法の貴賤貧富を分くるは、善法に非ざるなり、我が法を行なうは、當に貴賤を等しくし、貧富を均しくすべし。』〔三朝北盟會編〕卷一三七〕

と、あくまでも經濟的な要求であり、その行動も

「官府、城市、寺觀、神廟及び豪右の家を焚き、官吏、儒生、僧道、巫醫、卜祝及び仇隙有るの人を殺す。」〔同〕  
というふうな、地方の惡徳官吏や土豪劣紳を打倒せんとするものであ



る。

また、招安は事態の解決にはならないとしてそれを拒絶した點も兩者に共通している、方臘の方は、

「宣和三年二月、甲戌、降詔招撫方臘。」（宋史「徽宗紀」）

とあり、それを受けなかったことが知れる以外はほとんど記録がないが、楊么の場合は、

「鼎州太守程昌禹遣劉醇、荆湖南北宣撫使孟庚遣朱實、……邵州太守和環亦果遣人招安、皆爲賊所殺。」（南宋、岳珂編「金佖稗編」卷六行實編年卷三、紹興五年の段）

と招安を拒み続け、岳飛が鎮壓に派遣されてくると、動搖した部下の楊欽夏誠等が次々と無抵抗で招安に就いていくが、獨り楊么だけは降伏を肯んぜずして殺されるのである。

以上、宋代の二つの農民起義は、經濟的要求を掲げ、主として惡徳官吏を打倒の對象とし、招安を拒否してあくまでも闘うという姿勢を堅持し、しかし異民族に積極的に對決する意欲は缺いていることを見できた。ただし次のような事實があつたことを見逃がすことはできない。金軍の北中國占領後、劉豫を頭とするカイライ政權が擁立されるが、劉豫の部下李成は、楊么の軍の聲勢壯大なるを見、南宋攻略にこれを利用しようと考え、水寨に人を派遣して説得したが、第二回目に差わたした三十五人を、水寨では一夜泥酔させた上、全員を殺して屍を江中に沈めたということがあつた。ことは岳珂「金佖續篇」卷二六、（百氏昭忠錄卷一〇）に詳しいが、彼らには金軍や劉豫の偽齊と結びつくことを潔しとしない氣慨があつたことも否定できない。ただ彼らの闘争目標はあくまで經濟的要求を實現することであり、明確な反侵略の綱領や、目的意識的な抗金闘争はなかつたということである。

そして水滸傳の、武松や李逵などの非知識人グループも、阮氏三兄弟のように經濟的な壓迫から反抗の道を歩むようになった者が多いはずであり、貪官汚吏を誅罰の對象とし、そして招安に反對しているが、「一」で見た通り、異民族との對抗心を缺いている。

このように武松や李逵などの意識と行動とは、むしろ方臘、楊么などと同質であり、宋江らとは異質のものである。この違いを、方臘の部下錢振鵬が關勝に投げつけた次の言葉が鮮明に浮き上がらせている。

「量你等一夥、是梁山泊草寇、不知天時、却不思圖王霸業、倒去降無道昏君、要來和俺大國相并。」（水滸傳百十二回）

忠君などは問題にしない純粹な農民起義の立場と、忠君なるが故に方臘を鎮壓に來た宋江らの立場との鮮明な對照である。

## 五

「四」の項の初めで、私は梁山伯に結集した一〇八人を、その抱く意識によって二種類に分け、以下武松、李逵などの後者がなぜ反異民族感情をもっていないのかを考察してきたが、更に、前者の宋江らでさえも、「二」で見たように、この意識が稀薄であるのはなぜなのかを考えてみたい。

「惟願朝廷早降恩光、赦免逆天大罪、衆當竭力捐軀、盡忠報國、死而後已。」（七十一回）

「我主張招安、要改邪歸正、爲國家臣子。」（同）

「宋江等本無異心、只要歸順朝廷、與國家出力。」（七十七回）

宋江のこれらの語から、彼の「盡忠報國」「與國家出力」意識は、「朝廷早降恩光、赦免逆天大罪」とか「只要歸順朝廷」といった招安を待望する氣持ちと分ち難く結びついていることが判明する。彼にしてみ

れば、梁山泊に據つて朝廷と對立することは、朝廷に對する犯罪行爲であり、平生の志とはかけ離れた甚だ本意なことである。この考えが更に、だから一日も早く招安を受け、國家に盡くしたい、という方向に發展するのは自然の勢いである。

このような考えに基づいて彼は招安を受けることになるのだが、その上この「與國家出力」觀↓招安という線の延長線上にあるものが大遼遠征であり、方臘征討である。前者の場合は「敢不竭力盡忠、死而後已」(八十三回)と決意を語り、後者の時も「前去征剿、盡忠報國」(百十回)と抱負を述べている。

さて、一〇八人の中には宋江と同様の考えをもち、同様に行動した者は他にもいる。

「只等朝廷招安了、早晚都做個官人。」(四十四回)  
と招安を期待した戴宗や、

「我等在梁山泊時、已是大罪之人、幸然不死。感得天子赦罪招安、北討南征、建立功勳。」(百二十回)

という花榮がそうである。この三人に限らず一〇八人の半数程がそうであったのではないか。宋江個人の存在は大きかったとはいえ、暗黙のうちに彼の『招安路線』、そして大遼遠征、方臘征討の行動を支持した者がいたからこそそれらは實現したのである。宋江と二、三の者以外は皆反對というのであれば、あのようにはならなかったはずだ。

ところで宋江も戴宗も、ともに下級官吏(宋江は鄆城縣の押司、戴宗は江州兩院押牢節級)の出身であるが、花榮はかつて官營の清風寨副知寨であり、軍官であった。この部類の多くは、宋江が

「你看我衆兄弟們、一大半都是朝廷軍官」(六十五回)  
と言うように、かつて軍官であったが、何か落度があったか、とにか

些細なことがきっかけになって上司から追求されるはめになり、生きのびる唯一の方法として梁山泊に落ちてきたか(花榮、林冲、楊志など)、梁山泊掃蕩戦で宋江らに歸降したか(關勝、呼延灼など)、とにかくもともと自分の生活に満足して、反抗心などあまりなかったが、ある時のふとした『人生の狂い』から反抗の道を歩まざるを得なくなった者たちである。

幾人かの水滸研究者は、水滸英雄の意識と行動とは、金軍の南侵後の北中國で、その支配に甘んぜず、山河の險所にたてこもってゲリラ戦を展開した「忠義軍」の事跡が反映していると指摘する。嚴敦易氏によればその最も重要な根據地が太行山であり、彼らのうちで最も有名なものが「八字軍」と「紅巾軍」で、「八字軍」の如きは、顔に「赤心報國誓殺金賊」といれずみし、金軍と戦う決意を示していたという。また張政娘氏の「宋江考」によると、忠義軍の階級構成は大變複雑で、農民の他に、多くのもと官吏、保正(庄屋)、土豪、大姓、良家子弟等々の封建主義分子がおり、しかして指導権は往々にして封建主義知識分子に握られていたという。

この忠義軍の活躍が水滸故事の生成に影を落としているという説は大いに傾聴に値する。後日稿を改めて私なりに論じてみるつもりだが、ただ私は水滸起義は、全面的に忠義軍を反映したとする兩氏の意見には反對で、正確には宋江らのグループにだけ反映していると考えべきである。というのは、忠義軍の場合は、『忠義』がその下に一隊を團結させる旗印であったように見えるが、水滸傳の場合は、『忠義』は水滸英雄たちを打って一丸とするその軸とはなり得ていないのであって、他よりもより有力なスローガンというに過ぎないからであ

る。

とまれ水滸起義はその説話の成立當初からある程度義軍としての性格を付與されていたようだ。南宋から元にかけての人龔開の「宋江三十六人贊」(周密「癸辛雜識」續集上所引)が三十六人の名を列擧してめいめいに八字ずつの評語を加えた中に、「義國安民」(吳學究)、「國功可成」(孫立)、「願隨忠魂」(張順)、「能持義勇」(楊雄)などであるのからそれは察せられる。

しかしここでも顯著なのは、忠義軍の活躍を反映するなら尙更のこと、たとえそうでないにしても、「義國安民」とか「國功可成」と言っているのだから、その具體的な裏づけとして、異民族の侵略撃退といったことに少しは言及してよさそうなのに、そのような痕跡は絶えてないことである。

「宋江三十六人贊」は、ただの名前の羅列に過ぎないが、元代の成立と目される「宣和遺事」になると、ある程度まとまった筋ができあがる。ところでこの「宣和遺事」でも、この書全體としては北方民族の侵略から来る危機意識が初めから強く流れているのだが、この書の一部分を占める水滸關係記事は、この書全體の流れとはあまりマッチしない異質なものであって、「廣行忠義、殄滅奸邪」、「助行忠義、衛護國家」などとうたってはいるが、特に異民族の侵略から國を守るという氣組があるとも思われない。

そこで私はこの二つの事實から次のように推定する。これ程に宋江らの活躍が異民族へのレジスタンスとは無關係にされているのは、何か原因があったのではないか。異民族の侵入と宋江らの活躍との結合を阻止する壓力のようなものがあつたのではないかと。そしてその壓

力はおそらく元朝における異民族統治ということではなからうか。その下で民衆は露な反異民族感情の表出は遠慮せざるを得なかつたのではないか。

「宋江三十六人贊」の作者龔開は、普通南宋の人と言われるが、元朝になってからも生存しており(「新元史」卷二四一に傳がある)、元朝の統治下でこれを書いたと考えることは可能である。「宣和遺事」にしても、この水滸關係記事が生長してくる過程で、そういった外的な規制を受けたことは大いにあり得よう。

元曲になると、この邊の事情は更にはつきりする。水滸故事を題材にした、例えば「黒旋風双獻功」、「燕青博魚」、「大婦小妻還牢末」などの元曲には、凡そ遼だとか金だとか、異民族の侵入がどうだとかいう記述は全然ない。

水滸戯曲に限らず、全般的に元曲には、直接的な民族意識の表出はあまりないとされている。しかしそれは、民族意識が初めからなかつたということではなく、多くの場合抑制せざるを得なかつたということである。この邊の事情を、中國科學院文學研究所編「中國文學史」では、次のように述べている。

「當時の社會では、最高のそして主要な統治者は蒙古族の上層階級である。廣大な被壓迫民族の人民から言うと、彼らと蒙古統治階級の矛盾は階級矛盾であり、また民族矛盾でもある。いくつかの雜劇作品は階級矛盾を通じて間接的に民族矛盾を表現し、民族の敵をも階級の敵であると見なし、これらの作品の蒙古統治階級に對する批判と譴責は、壓迫を受けている全體の人民の思想と感情とを反映したものである。」(七二一頁)

このように異民族統治のワタが、元曲においても梁山泊の英雄たちと

反異民族意識とが結合するのを妨げたと考えられる。

ただしここでも断つておくが、「三十六人贊」、「宣和遺事」、元曲のいずれもが異民族へのレジスタンスを語らないのは、「四」で説明したように、水滸英雄の半数ほどは農民起義の思想と行動とを受け継ぎ、反権力意識は強烈でも、反異民族闘争にはそれほど積極的になれなかつたという事態にも由来していることは疑いない。これらの水滸説話の發展の後を受けて明初に成立した水滸傳でも、李逵や魯智深などに愛國心が稀薄なのは、同じく「四」で説明した理由に基づくが、宋江らの愛國心が異民族との對抗心にまで發展しなかつたのは、水滸説話が小説として結實するまでの發展過程で、こうした規制を受けたからだと思われる。

だからこうした制限が取り拂われ、その上「北虜南倭」の異民族の侵掠に惱まされる明代になると、梁山泊の英雄たちも強い民族意識に目覚めているように描く作品も現われる。例えば「宋公明排九宮八卦陣」雜劇がそれであり、これは元明間の無名氏の作とされているが、大遼遠征の一段を素材にしたものである。

この作品では、李逵など、「忠」や「義」などは縁もゆかりもなさそうなメンバーも盛んに「忠義」を唱え、ある程度大遼への對抗心をもっていることが、水滸傳の、特に大遼遠征の段と比較した場合の大きな違いである。彼らのこの種の發言を列挙すると、<sup>(9)</sup>

李逵：

- 1 「俺則待扶着宋室江山」(一折)
- 2 「秉忠心保宋朝」(二折)
- 3 「腹内忠心敢去敵」(二折)
- 4 「弁着片盡忠心共扶皇上、捨殘生安定邊疆」(三折)

解珍、解寶：

- 1 「今爲宋國報君王」(三折)
  - 2 「虜寇起心生忿惡、離梁山歸降及早」(三折)
- 水滸傳の大遼遠征の段では、彼らのこの種の發言は絶えて一つもないのである。

これらは異民族に對する熾烈な敵がい心と言つたら言い過ぎである。直接に大遼を意識しているというよりは、どちらかと言えば宋朝に對する忠誠心である。水滸傳では、彼らはこうした忠誠心を全く語らなかつたのは、農民起義の性格を忠實に反映しているからであつた。とすると「九宮八卦陣」では彼らに無理に愛國心を附與し、水滸傳のそういう精神は失つてしまつたことになるが、彼らにも愛國心を發揮させたい時代的要請があつたに違いないから、この作者を一概におとしめることはできない。水滸故事の成立當時はなるほど農民起義の性格を忠實に反映して彼らは愛國心をもたなかつたが、元代でももし外的な規制がなかつたら、おそらく「九宮八卦陣」的な方向に發展したに違いないのである。異民族統治のワクが、そうなるのを阻んだに過ぎない。

一方この雜劇での宋江らの言動はどうか。やはり列挙すると、

宋江：

- 1 「收伏水泊歸眞主、赤心扶佐宋華夷」(一折)
  - 2 「離梁山衆將恭心、奉聖命勦捕賊兵、排陣勢施謀定計、定宋朝天下太平。」(二折)
  - 3 「功興宋業江山定、保助家邦統大軍」(三折)
- 吳用：
- 1 「今歸宋國扶眞主、保護乾坤宇宙寧」(一折)

2 「俺既歸大宋、盡心報國」(二折)

3 「這國朝的軍令、難同俺山寨上的號令、俺須隨時而行也」(三折)

4 「扶眞主四海寧安、用機謀大破遼兵」(三折)  
その他：

1 「新降宋國誅遼寇、定亂除危百戰功」(三折、韓滔)

2 「狼牙棒舉誅賊寇、報國忠勳大丈夫」(三折、秦明)

3 「梁山義士遵朝命、大破遼邦一陣功」(四折、盧俊義)

4 「新佐天朝立國基」(四折、楊志)

以上であるが、水滸傳の大遼遠征の段の「盡忠報國」の類の發言は、合わせて五回(全て宋江の言)に過ぎず、かつ大遼遠征の段(八十三回〜八十九回)は「九宮八卦陣」の、少な目に見積っても三倍の長さであることを考慮に入れると、ここでは宋江らの愛國心もより強化されていると言えるが、しかしやはり異民族に對する熾烈な敵がい心であるとは言い難い。

けれども、もう少し後の時代の李開先(一五〇一〜一五六八年)の撰になる「林冲寶劍記」では、激しい反異民族感情が語られている。水滸傳の林冲は、權力者に迫害されて止むなく反抗の路を走るのであるが、それを初めから積極的な反抗に出るタイプの人間として描きかえたほかに、彼を熱烈な愛國主義者に仕立てあげた。

「胡塵風起暗龍樓、長嘆爲君憂」(四齣)

「爲慮國家信用高傑等……逼迫得天下荒荒、胡馬南渡、因此彈劍作

歌、以瀉心事」(四齣)

「醜虜迎頭破、奸臣透膽寒」(四齣)

「只怕棄丘陵變與南渡」(四齣)

水滸傳の對異民族意識について

「小官因政和二年、從征西羌、戰奪邊城、窮追殘寇。」(十八齣)

「數十番戰退匈奴」(二十四齣)

「邊塵邊塵、不日紛紛、因失了中原恩信」(四十齣)

林冲が「胡馬南渡」(靖康の變を指す)などを口にしたはずはないが(彼は、水滸傳によれば、方臘征討からの歸途病に染まり、その後半年くらいで死亡している。方臘征討からの凱旋は宣和五年の秋である)、この場合の林冲の反異民族感情はまさに陸游の程度にまで激しいものになっていると言える。そしてそれはおそらく北虜南倭に惱まされた當時の國情が然らしめたのである。

しかし明代の水滸戯曲全てが、制限が取り拂われた結果、「九宮八卦陣」的、あるいは「林冲寶劍記」的方向へ發展を遂げたわけではない。いなむしろ依然として反異民族感情は割合に稀薄な作品が多いのである。ということ、異民族の侵掠に惱まされ、かつそれに對する憤激を自由に表現できた明代にあつても、こうした方向へ發展さすことが必ずしも有意義だとは思わない人も多くいたことを物語っている。

## 六

このように農民などの非知識階級と下級官吏を中心とする知識階級とが合同してまき起こした轟々烈々たる大運動は、今まで見てきたように半ば農民起義的性格をもち、そしてあるいは半ば忠義軍的性格を有しているかも知れないのだが、全體としては、では一體何であったのだろうか。この問題を考へてみるのには、實際にあつた宋江起義を分析してみるが大いに參考になる。

しかし歴史上の宋江起義については、「宋史」などに零碎な記載が

あるだけで、それが起こった背景とか、『齊魏に横行した三十六人』(「宋史」)の出身階級などは考證すべくもない。そこで、宋江らの話が最初にまとまって現われる「宣和遺事」について、この起義が起きた背景を探ってみよう。

初めに、

楊志は十二人の指使の一人として花石綱運搬に従っていたが、ある時ちょっとした失策をして獄に送られ、衛州に刺配されることになる。その護送の途中李進義、孫立等が彼を救出し、ともども太行山に落草する。

という話柄が載っている。彼が役人としてどの程度の地位におったかは、「指使」とか「誥劄出身」とあつてもさだかではない。ただ水滸傳に、「三代將門之後、五侯楊令公之孫、……曾應過武舉、做到殿司制使官」(十二回)とあり、楊志は宋代の名將楊令公の子孫であり、殿司制使という天子側近の軍官となつたと記している。殿司とは殿前司のことであり、都指揮使などの上であり、宮廷關係の官としてはかなり上級と見うけるが、官僚機構全體から見たらさほどの大官でもなさそうである。且つ「宣和遺事」にいう指使とは、監督者、指揮者くらいの意味であるから、「宣和遺事」に登場する楊志は、花石綱運搬の人夫を指揮する中堅役人というところであらう。

楊志のつまずきの直接の原因は、彼が人を斬つたということであるが、寶刀を賣りに出すまでに彼を落ちぶれさせたのは明らかに花石綱運搬の仕事の厳しさである。方臘起義は、直接には花石綱の重い負擔に耐えかねて起こったのだが、方臘はその收奪の對象とされ、楊志らはその收奪の手先であつたという違いこそあれ、「花石綱」という悪政の犠牲者である點は共通している。

花石綱だけではなく、「青溪寇軌」の所謂「聲色狗馬、土木禱祠、甲兵花石靡費、歲賂西北二虜銀絹」など、侯外廬氏が「專制主義國家は、全國を統制して封建統治を強固にするため公共事業を強化するが、それは人民の負擔を重くし、彼らの反抗を激發させる。」という趣旨のことを言う場合(前掲論文)の「公共事業」に相當するものが假借なく推進され、その他の悪政も加わって、直接の苛斂誅求の對象とされる人民大衆はもとより、その誅求の片棒を擔がされる下級あるいは中級官吏をも反抗の道を走らせてしまうような條件が備わっていた。「宣和遺事」の楊志をめぐる話柄がその實例である。そして、實際の宋江起義の隊伍に、この楊志のような經歷をもっている者がいたかどうかは無論解らないが、北宋末の政治、社會狀況には、このような人物を生み出す素地は十分にあつた。

ところで、水滸傳では、楊志の話は更に次のように作り變えられている。

彼は花石綱運搬で失策をし、逃げ回っていたが、何とかその筋に取り入って元の地位を回復しようとする。彼の幻想は高俅によって打ち碎かれるが、彼はなお封建統治機構で榮進する夢を捨てない。蔡京の娘婿、北京留守梁中書に見こまれて生辰綱運搬を仰せつかり、出世の好機到來とばかり使命達成に全力を盡くす。しかし晁蓋らに黃泥岡で十萬貫の金珠寶貝を盡く奪い去られ、榮達の道を完全に塞がれて、彼も漸くに梁山泊へ向かう。

このように、一旦權力機構からはじき出された人間が、どんなに努力しても二度とは入りこめず、ついには反權力の集團に走らざるを得ないはめになる話に組み直している。なるほど水滸傳でも、楊志の花石綱運搬の失敗を

「道君因蓋萬歲山、差一般十個制使去太湖邊搬運花石綱、赴京交納。不想酒家時乖運蹇、押着那花石綱、來到黃河裏、遭風打翻了船、失陷了花石綱、不能回京赴任、逃去他處避難。」(十二回)

「曾向京師爲制使、花石綱累取艱難」(五十七回)

というふうによく取り上げてはいるが、「宣和遺事」の單なる「花石綱運搬の犠牲者」という位置から、より明確な形の「權力者から迫害される者」という位置に押し上げている。

私は、「水滸傳の構想のしかたに關する一試論」(吉川博士退休記念論文集一九六八、京都、所收)で、

「王安石や新法黨に對する憎惡の念が一方にあり、又一方には宣和の姦臣たちに對する糾彈の意識があり、そしてそれらがいっしょくたになつて北宋後半期の統治集團に對する激しい反撥となつたものが、當時から元代にかけて朝野に瀰漫していたと豫想される。」

と書き、この中央の統治集團に對する反感と、元曲に表現された地方の濫官汚吏指彈の念、水滸作者はこの二つものを結合して取り入れて「反權力の思想」を明確に打ち出し、そこから更に水滸傳のいくつかの段を構想した、と論じた。水滸傳の楊志の段もまさにこのようにして構想されたものである。「宣和遺事」では、花石綱のような悪政は統治機構の中の者をも反抗する側へ追ひやつてしまふという認識であるが、水滸傳ではこれを更に深めて、「花石綱運搬での失策に始まる彼の経路には、權力者の冷酷な壁が絶えず立ちふさがつた。最後には體制から逃げ出さなければ生きる方法すらなくなつた。」というふうに、權力者による迫害という點を明確に打ち出している。極度の悪政は、その末端の擔い手をも反抗に立ち上がらせるといふ認識(「宣和遺事」)が更に進むと、ではその悪政の實態は何か、その推進者たちの

正體は何か、ということになつてくる(水滸傳)。このような認識の深まりは、文學として水滸傳がなした大きな功績である。

楊志や林冲などは、こうして自分たちを不當に迫害し、體制から自分たちをはじき出した者たちに激しい憎惡の念を燃やした。林冲を滄州道に刺配し、楊志を汴京城に流落させた高俅、林冲の妻を奪おうとした高俅の子高衙内、柴進を落とし入れた高俅のいとこ高廉。また蔡京、童貫も中央にあつて悪政をほしのままにした奸黨だが、彼らや反詩を題したカドで宋江を捕えた、蔡京の子の江州知府蔡得章、更に加えて花榮をなきものにししようとした清風寨正知寨劉高など、これら中央地方の、個人的なつながりももつた大小の濫官汚吏が彼らの打倒の對象とされた。

一方これら濫官汚吏から有形無形の壓迫を受けている點は、被壓迫階級出身の水滸英雄にも全く共通している。「此等不義之財、取之何碍」ということで結束した晁蓋等七人の、結果的には敵となつた、蔡京の娘婿でもある北京留守梁世傑。あるいは孔明、孔亮兄弟を壓迫した青州知府慕容彦達、また毛仲義の意を受けて解珍、解寶兄弟に無實の罪を着せた登州六案孔目王正などが彼らの打倒目標である。こうしたはつきり目に見える形での壓迫のほかに、彼らは絶えず統治階級によつて生活の地盤を脅かされていて、それに對する反感は相當に根強かつたであろうし、そしてそうした悪政の直接の擔い手たる貪官汚吏に對する反撥が意識の底に沈澱していたと思われる。

また西門慶のような悪質成金、解珍、解寶を落とし入れた毛仲義の如き悪徳土豪、梁山泊と對立する勢いを示した祝家莊や曾頭市などの大地主勢力などが攻撃目標となつた點も一致している。

つまり非知識階級の者も、知識階級の者も、中央地方の濫官汚吏、

あるいは地方の悪徳土豪などを打倒するというものでは完全に目標が一致したのである。こうした完全な一致團結に基づいていたから、この目的を追求している間は、梁山泊軍は驚くべき力量を發揮し、祝家莊を平定し、曾頭市を踏みじり、北京城を攻撃し、童貫を二敗させ、高俅を三敗させて、文字通り向かう所敵なしの快進撃を續けた。しかし、こうして梁山泊軍が高俅を生捕りにするほどの巨大な勢力に發展し、自分たちに立ち向かってくるものを片端からなぎ倒してしまふと、宋江らには所期の目的は達せられたように思えた。少なくとも一應の區切りはついたように感じたのではあるまいか。そして何しろそれまで罪悪感もちながら反抗を續けてきたのであるから、この期に及んで招安を受けたいと願うようになるのは極めて自然である。勿論彼らのそういう意識の傾斜に拍車をかけたのが例の忠義觀念である。

しかし一方、李逵や魯智深などの被壓迫階級出身の者にしてみれば、長期に涉つて、それこそ父祖の代から受けた壓迫の痛みを骨身に徹して感じているから、招安を受けることは少しも事態の解決にはならないと肌で感じたに違いない。魯智深の、

「招安不濟事」

という言葉は、その感じを端的に表明したものである。ましてや彼らには忠義觀念などは縁がないのであるから、招安を受けることに反対したのは當然である。

ここにおいて梁山泊の完璧な一致團結は崩れ、魯智深が「招安不濟事」と言った後で、

「便拜辭了、明日一個個各去尋趁罷」(七十一回)

と提案したように、一時は分裂しかねない雲行きとなる。しかし結局

は招安を受けた後も團結を持續し得たわけであり、それは、宋江らが「與國家出力」というような彼らなりの見通しをもっているのに對して、魯智深らは自分たちの起義の前途に對する明確な見通しをもてず、従つて宋江らの考えに積極的に反對はできなくて、消極的に贊同せざるを得ない結果になったためである。

こういうわけで、招安を受けた後の水滸英雄たちの團結は、それ以前のと較べたらかなり弱いものであつたに違いない。大遼遠征の途次の吳用の

「棄宋從遼、豈不爲勝」

という驚くべき言葉や、あるいは卷尾の、李逵の反心を宋江が押さえるところなどは、たまたまこの團結の弱さを露呈したものである。

魯智深らが招安を受けることに反對したのは、對案を提出してのものではなかつたにしろ、被壓迫階級としての革新性を表わすものである。しかし宋江らが招安を希望したことも、一概に「投降路線」と非難するのは間違ひである。宮崎市定氏は「宋代の士風」(「アジア史研究」第四、所收)で、次のような趣旨のことを述べている。

「士大夫階級が天下の憂<sub>レ</sub>天子の憂を問題にすると、逆に彼らの社會的特權を掘り崩してしまふ危険があるので、こちらの方は頼破りして素通りし、天子の家事についてさへ責任を取ればよいことになつた。こういう奴婢的な忠義論が、宋代以後君主獨裁權の發達に平行して起こつた。」

そして、「どれだけ士大夫として天下人民の爲に利益になつたか」という本來的な義務を遂行しようとした文天祥など少數の例外を除けば、宋代の士大夫は大方この線にそつて行動したと論じている。

宋江らの抱く「盡忠報國」などの士大夫の意識は、この墮落した士



風とは明らかに違っており、いわば本然的なもの、正統なものである。彼らはこの本然的な士大夫の自覺に立脚しつつ異民族の侵略を撃退するという積極的な役割を果たしている以上、彼らも相應の評價を與えられるべきであつて、一概に否定されるべきではない。

以上私は、水滸英雄には二種類の異質な集團があり、その一方は歴代農民起義の意識と行動とを反映しており、他方は南宋の忠義軍の事跡を反映しているかも知れないことを論じてきた。そしてこうした二面的性格をもつた水滸起義は、たとえ歴史事實としての宋江起義の實態とはかけ離れたものであつても、北宋末期の封建專制政治の支配強化の中で、起り得る可能性は十分であつたことを知るべきである。このことを再確認してこの稿を終ることにしたい。

注(1) 水滸傳のテキストとしては、「水滸全傳」(一九六一、北京)を用いた。

(2) 「讀水滸傳與水滸戲」(「水滸研究論文集」一九五七、北京、所收)

(3) 「盡忠報國」は岳飛の標語(背中にいれずみしていた)であるが、南宋以後の水滸説話の發展過程で吸收されていったものと思われる。

(4) 念のため、更に例をあげる。「千年史策恥無名、一片丹心報天子。」(「金錯行」)、「平生萬里心、執戈王前驅。」(「夜讀兵書」)。

(5) 注(2)に掲げた論文。

(6) 陸游はこのことについて次のように言っている、

「古えより盜賊の興るは、若しただ水旱饑饉により、寒餓に迫られ、嘯聚攻劫すれば、則ち措置に方有れば便ち撫定すべく、必ず大いに朝廷の憂となるあたわず。」(「渭南文集」條對狀)

(7) 方臘起義の性格は、水滸傳の方臘起義のものについて記述した部分

水滸傳の對異民族意識について

に、大體そのまま反映されている。水滸傳ではこの起義の原因を

「因朱勳在吳中征取花石綱、百姓大怨、人々思亂、方臘乘機造反。」(「百十回」)

と述べているのも、「青溪寇軌」などの記述とはほぼ一致する。

(8) 「水滸傳的演變」(一九五七、北京)二六一—七頁。

(9) 「水滸研究論文集」(一九五七、北京)所收。

(10) テキストとしては傅惜華、杜穎陶氏編「水滸戲曲集」第一集(一九五七・上海)を用いた。

(11) 楊志が宋代に數々の武功を樹てた楊家一門の出であることは、小川環樹教授「魯智深とその類例」(「中國小説史の研究」一九六八、東京、所收)に詳しく考證されている。

(12) この「殿司制使」がどれほどの官であつたかについては、何心氏の「水滸研究」(「水滸傳中的官名」の章)に「宋史」職官志(六)を引用しての考證がある。

(13) 農民起義の限界について、侯外廬氏は前掲論文で次のように書いている。

「農民戰爭の綱領スローガンから言うと、歴史的條件や階級的限界によつて、その内容は、レーニンが指摘しているように、封建主義の社會現實を告發するのは得手であり、その破壊を得意とするが、現實の意義の上では前途に對する見通しを缺いている。」